

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.16

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Ron Carter 【ロン・カーター】



Photographer - Kunihiro Takuma 2003

Profile

1937年5月4日、米国ミシガン州ファーデイル生まれ。10歳の頃からチェロ、18歳の時にベースを弾き始め、NYのイーストマン音楽院とマンハッタン音楽院で学位を修得。1959年にチコ・ハミルトンのグループでプロ・デビューを飾る。その後、ポール・チェンバースの後釜を探していたマイルス・デイビスの目に留まり、1963~68年までマイルスのクインテットに参加。同時期に加入したハービー・ハンコック(p)、トニー・ウィリアムス(ds)と共に名声を得る。同クインテット脱退後はフリーランスとなり、CTIレーベルからリーダー作を発表すると共に、ジョージ・ベンソン等 CTI の看板アーティストたちをサポートし、70年代以降もセッション・ベーシストとして人気を博す。また、ベースだけでなく、ピッコロ・ベースを導入し、クラシックやボサノヴァを取り上げるなど幅広い音楽性も披露し、ベーシストとして不動の地位を確立。80年代以降もニューヨーク市立大学やマンハッタン音楽院で教鞭に立つなど、後進の指導にもあたり、2004年にはパーカー音楽大学より名誉博士号を授与される。来日の機会や日本のテレビCMへの出演歴も多く、日本での知名度は抜群。“ミスター・ベース”と称され、これまでに2000以上の作品にクレジットされるなど、70歳となった現在もその健在ぶりを示している。

このベースマンほどベースの似合う男はいない！

《ミスター・ベース》

そのワン・アンド・オンリーなベース・サウンドだけでなく、ロン・カーターほどウッドベースという楽器が似合うジャズマンはいないだろう。今や伝説となりつつあるマイルス・デイビスの「第二期黄金クインテット」でその存在感を際立たせて以降の八面六臂の活躍ぶりは周知の通り。現在、世界中で活躍するジャズ・ベーシストたちに多大な影響を与え続けているが、我が日本では「WE THREE TRIO」などでお馴染みのベースマン、高梨道生が90年代からロン・カーターに師事しており、この偉大な“ミスター・ベース”の魂を受け継いでいる。

そして、今年2009年の1月下旬に絶好のタイミングで本国アメリカで作家 Dan Ouellette 著によるロン・カーターの伝記『Ron Carter - Finding the Right Notes』が発売された。実物はまだ手にしていないが、ロン・カーター本人も自身のオフィシャル・サイト (<http://www.roncarter.net/officialSite.html>) で紹介しているように、ロン・カーターというジャズマンを知る上で重要な資料であることは間違いない。また、ジャズ・ベーシストには必見・必読のロン・カーター本人による教則本『Ron Carter - Building Jazz Bass Lines』も興味深く、どちらも英語版のみの発売で日本語版はまだ発売されていないと思われるが、興味のある方は上述のロン・カーターのオフィシャル・サイトよりチェックしてみて欲しい。

ジャズ界の CM 王

昨年、小気味よいカウントと共にビートを刻み、「タリ〜ズ」と洗キメる「伊藤園 / TULLY'S (BARISTA'S SPECIAL)」のテレビCM『タリ〜ズ・セッション〜ロン・カーター篇』でも話題を呼んだが、嘗ての「サントリー・ホワイト」「第一生命 リード21」のテレビCMやギタリストの山口武と共に出演した服飾メーカー「エフワン」のテレビCMなど、ロン・カーターほど日本のテレビCMに出演機会の多いジャズマンはいない。その味のあるベース・プレイだけでなく、お洒落＆紳士的でスマートな佇まいは、洗いジャズ・ベースマンのイメージにピッタリ！

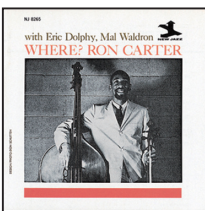
ロン・カーター Interview !

手に取って読んで頂く機会がなかった方々の為にお知らせしますが、2005年7月本誌『The Walker's』の第2号「Jazz Interview」のコーナーにて、ロンさんとのインタビューが実現しています。楽器のことは勿論、マイルスの「第二期黄金クインテット」に加入する際のいきさつから他のベーシストたちに関するコメント、音楽以外の趣味に至るまでの貴重なインタビュー記事に加え、本誌編集長が撮影した優れ微笑むロンさんの写真まで必見の内容を誇っています。興味がある方はぜひバック・ナンバー(本誌P30参照)にてGETして下さい！

RC's Great Album

CTI/KUDU 時代の音源を集めた『ベスト・オブ・ロン・カーター』、ジム・ホールとのデュオ作品、ピッコロ・ベースやクラシック、ボサノヴァをフィーチャーした作品もお薦め！

エリック・ドルフィーを迎え挑んだ
ロン・カーターの初リーダー作品！



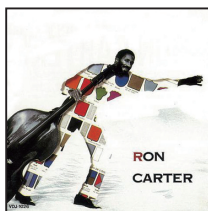
Where?

Ron Carter with Eric Dolphy, Mal Waldron
(Original Jazz Classics: 432 [Import])

Ron Carter (b, cello), Eric Dolphy (as, bs, fl), Mal Waldron (p), George Duvivier (b), Charlie Persip (ds)

1. Rally 2. Bass Duet
3. Softly, As In A Morning Sunrise
4. Where? 5. Yes, Indeed 6. Saucer Eyes

80年代にテレビ・コマーシャルで
流れたあのナンバーも収録の快作！



ザ・マン・ウィズ・ザ・ベース
ロン・カーター
(現在国内未発売)

ロン・カーター (b, piccolo-b), J.J. ジョンソン (tb), ジェイ・バリナー (g), ケニー・パロン (p), アール・ウィリアムス (ds), 他

1. 36414 2. NY スリック 3. いくつか王子様が
4. 12+12 5. ソング・フォー・ユー
6. ダブル・ベース (他、全 9 曲)

このアルバムは 1986 年録音の作品で、筆者が初めてロン・カーターというベースマンの存在を知った思い出の作品だが、それは 80 年代半ばにロンが『サントリー・ホワイト』のテレビ CM に登場した時だった。本作の収録曲「36414」「ダブル・ベース」が CF イメージ・ソングとして使われ、ロンの洗練姿と共に衝撃を与えてくれた。この 2 曲だけでなく、スリリングでエキサイティングな NY の雑踏を思い起こさせる「NY スリック」「12+12」や「アー・リオ」など、ロンの最高のオリジナル・ナンバーも収録。再発を望む！

ミスター・ベースが率いる最高の
ドラムレス・トリオ 2007 年の作品



イツ・ザ・タイム
ロン・カーター

(EMIミュージック・ジャパン: TOCJ-68075)

ロン・カーター (b),
ラッセル・マローン (g),
マルグリュー・ミラー (p)

1. イッツ・ザ・タイム 2. エディズ・テーマ
3. マック・ザ・ナイフ 4. キャンドル・ライト
5. 朝日のようにさわやかに (他、全 10 曲)

2007 年にマリグリュウ・ミラー (p) とラッセル・マローン (g) とのドラムレス・トリオで録音された本作のオープニングとエンディングを飾る「イツ・ザ・タイム」は、昨年テレビ CM 『タリーズ・セッション〜ロン・カーター篇』で話題となったナンバーで、エンディングのボーナス・トラックがテレビ CM ヴァージョンだ。このトリオの結成は 2002 年で、本作は『ゴールデン・ストライカー』に続くトリオ第 2 弾。初録の「キャンドル・ライト」から名スタンダードまで、ロンのベースマン魂が唸る！ このトリオは本当に最高だ！！

RC's Support Album

マイルスのクインテット在籍時の名作やケニー・パレル、フレディ・ハバード、VSOP や CTI レーベルに残した作品など、紹介し切れないほど数多くの名盤が存在する。

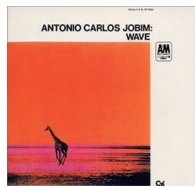


イン・パーソン

ボビー・ティモンズ・トリオ

(ユニバーサル・ミュージック: UCCO-9646)

ボビー・ティモンズ (p) がロン・カーター (b) とアルバート・ヒース (ds) を従え、1961 年に NY 「ヴェレッジ・ヴァンガード」で行ったライブを収録。



波

アントニオ・カルロス・ジョビン

(ユニバーサル・ミュージック: UCCU-9411)

ボサノヴァの創始者、アントニオ・カルロス・ジョビンの最高傑作と称される名盤。ベースはロン・クレード・テイラーがプロデュースを担当。1967 年録音。



マグニフィセント！

バリー・ハリス

(ユニバーサル・ミュージック: UCCO-9355)

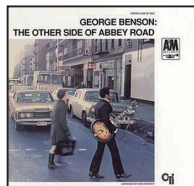
ビバップ・スタイルとその精神を継承する名手バリー・ハリス (p) がロン・カーター (b)、リロイ・ウィリアムス (ds) と吹き込んだトリオ作品。1969 年録音。



マイルス・イン・トーキョー
マイルス・デイビス

(ソニーレコード: SICP-20056)

1964 年のマイルス・デイビス初来日公演を収めた作品。S・リヴァース (ts)、H・ハンコック (p)、R・カーター (b)、T・ウィリアムス (ds) が参加。



アビー・ロード

ジョージ・ベンソン

(ユニバーサル・ミュージック: UCCU-5230)

ジョージ・ベンソン (g) がビートルズの名盤『アビー・ロード』の収録曲をカバーした名作。ベースはロンとジェリー・ジェモットが担当。1969 年録音。



Crossings

Red Garland

(Original Jazz Classics: OJC-472)

レッド・ガーランド (p) がロン・カーター (b) とフィリー・ジョー・ジョーンズ (ds) を従え、スタンダードを中心にいぶし銀の名演を披露！ 1977 年録音。